

2024年2月25日

説教題「神のいのち～ベトザタの池で～」ヨハネ福音書5章1～9、25～26節

主任牧師 加藤 誠

「はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞くとときが来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる」(ヨハネによる福音書5章26節)

今朝の箇所は38年間、寝たきりで横たわっていた人が主イエスと出会い、癒されるお話です。いわゆる「癒しの奇跡」の話ですが、「イエスという方はそのように病気を癒す力を持っていた」ということにとどまらない、もっと深い意味がそこには込められています。場所はエルサレムの羊の門の傍らにあるベトザタと呼ばれる池のほitori。その池の周りには「病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、身体の麻痺した人などが大勢横たわっていた」(3節)とあります。この池の水が動くとき、最初に水に入った者は癒される…という言い伝えを聞いて集まってきた人たちでした。想像しただけで胸が痛くなる光景です。この人も38年間、ここで暮らしてきたのでした。38年というと人生の大半です。何歳の時にここに来たのか。仮に10歳として、このとき48歳。当時の平均年齢を考えると人生の終わりが見えてくる年齢です。ずっと動けない。今日はちょっと買い物に行こうとか、親しい人を訪ねてみようかもできない。まして旅行に行くなど夢の夢。最初にここに連れてきてくれたであろう家族は、この時もこの人のところを時々でも訪ねてくれていたのでしょうか。どうもそういう気配は感じられません。誰か慈悲深い人が池のほitoriの人たちに配ってくれる食べものを口にするだけ。ひたすらここに横たわり続ける。それがこの人の毎日であり、人生だったのだろうか…などと思いを巡らします。

その人の前に、ある日、主イエスが立たれました。そして問いかけます。「良くなりたいか」と。ちょっと信じがたい言葉です。もし自分が病院に行き、初対面の医者からこんな言葉をぶつけられたらどうでしょうか。あまりに不躰で、失礼極まりない言葉です。主イエスはなぜこんな言葉をかけられたのでしょうか。その問いに対するこの人の応答から一つ分かること。それはこの人が「すべてをすっかり諦めていた」ということです。「主よ、水が動いた時、わたしを水に入れてくれる人がいないのです」。この人が最初にこの池のほitoriにやってきた時には「治りたい」と思っていたはずですが。「治りたい」という希望をもっていたからこそ、ここにきたはずですが。しかし、この人は池のほitoriでの競争に敗れ続け、誰も助けてくれないことに深い失望を覚え、もうすっかり諦めていた。そこまで思い巡らしてきて、ハッとしました。もし自分がいま病院に行くとしたら、それは治りたいから。治してまた教会の仕事がしたいから。でも、この人は「たとえ治っても帰る家もない、この年齢でどんな仕事をすればよいのか分からない」。「治りたい」というイメージ、希望をすっかり失って

いたのではないのでしょうか。この人の、人生に対する深い失望とため息を感じ取られたからこそ、主イエスはこの人の前に立ち、問いかけたのです。「良くなりたいか」と。それはこの人の命の根源に向かって揺さぶるように発せられた言葉だったのです。

そして、主イエスは言われます。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と。この言葉にも驚かされます。主イエスはここで「癒しの言葉」を口にしていません。普通は、癒してから「起き上がりなさい」というべきところ、癒してもいないのに「起き上がりなさい」と命じるのです。しかし、主イエスがこの人の命の根源に向かって語りかけられた時、この人は自分の足で立ち上がり、床を担いで歩き始めます。つまり、このお話は単なる「癒し」の話ではないのです。25節にあるように「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今はその時である。その声を聞いた者は生きる」という出来事が、まさにこの人の上に起こったのでした。それは、直前の24節「永遠の命を得、死から命へ移る」という出来事でもあります。「永遠の命」はヨハネ福音書のキーワードです。それは肉体がいつまでも生きるという意味での「永遠の命」ではありません。私たちは信仰をいただいても必ず肉体の死、終わりの時を迎えます。この「永遠の命」は「神のいのち」と言い換えてみるができると思います。私たちがイエス・キリストを信じるとき、私たちは「この世界を支配する死から、神のいのちに移される」。そして「死んだようになっていた者が、神の愛と信仰と希望のいのちを生きる者とされる」のです。

西南神学部の学生会が発行している「道」という文集に、神学部教授の濱野道雄先生が証しを書かれていました。昨年の夏に突然網膜剥離となり、緊急に手術を受けてしばらく何も見えない状態が続いた時、「この病気は治るにせよ、だんだん健康も思うようにいなくなってきたから、やがて同じ感じで一人で死んでいくのだろう」とまで考えたそうです。不安、絶望、孤独に沈む日々を過ごす中で、濱野先生はこう書かれています。「祈りました。その時、『私』の外から声がしました。私の隣りにいながら、私を越えて、イエスが共にいて、聖書の言葉を語りかけて下さる。私の思いを越えて、不安ではなく信仰の、絶望ではなく希望の、孤独ではなく愛の物語を語ってください。…駆けつけてくれる牧師、リモート礼拝で祈ってくれる教会の方々によって、私は信仰と希望と愛を支えられている」と。

私たちの隣りにいながら、しかし私たちを越えて、神にある信仰と希望と愛の言葉を語りかけ、私たちを「神のいのち」に招き入れてくださる方。イエス・キリスト。この方の命の言を聞く時、私たちは「死から命に」移されるのです。今、いろいろな意味で希望を見出しにくい世界において、この聖書が伝える「神のいのち」「命の福音」を大切に受け取り、私の隣人に、そして特に次の時代を生きていく一人ひとりに聖書の信仰と希望と愛を伝えていきたいのです。